

「強く雄々しくあれ」ヨシュア記1:5-9 木村一充牧師

この朝は、旧約聖書のヨシュア記1章から神の言葉を聞いてまいります。ヨシュア記はモーセの後継者となったヨシュアが、モーセが亡くなったあとイスラエルの民を率いてカナンの地に入り、その住民と戦って勝利し、征服したカナンの地をイスラエルの諸部族に「嗣業の地」（＝相続地）として割り当てる45年の歴史を書き記した書物です。かつて、イスラエルはエジプトの地で奴隷としてファラオに仕え、430年にわたって厳しい労役に従事していました。民の叫びは天にまで届き、その嘆きを主なる神は聞かれ、イスラエルの民をその御心に留められたとあります。その時、立てられたリーダーがモーセでした。モーセは赤ん坊のときファラオの娘にナイル川で拾われ、宮廷エリートとして育てられます。ところが、やがて成人した後には同胞の民イスラエルがエジプト人に牛馬の如く酷使されている場面を見て憤り、そのエジプト人を殺してしまうのです。宮廷エリートから一転して「お尋ね者」になってしまった彼は、ミディアンの地に逃亡し、そこで羊飼いとして40年間の期間を過ごします。この40年の期間こそ、モーセの最後の大事業を成し遂げるために、主なる神が用意された大切な期間だったと思われます。なぜなら、イスラエルの民がエジプトを出た後、シナイの荒野でさまよう期間、どこにオアシスがあり、どこまで乾いた砂漠が続くかを、羊飼いの経験を通して知ることができたからです。ただ、約束の地に入ろうとするその直前に、モーセはネボ山（ピスガ山）の山頂に立ちながら、120年の生涯を終えるのです。そのとき、彼は目はかすまず、活力もうせていなかったと聖書は書きます。まだ元気だったという。しかも、その墓さえも分からないと記されます。モーセは偉大な預言者であり、イスラエルの民に律法をもたらした巨人であります。モーセは今も生きていると聖書の記者は考えていたのです。

そのモーセの後継者とされた人物が、ヨシュアでした。1章1節で「モーセの従者」と呼ばれています。モーセの求めに応え、分身のように働いたモーセの側近、部下でありました。ヨシュアの名が初めて登場するのは出エジプト記17章です。イスラエルの民が、いまだシナイの荒野にたどり着く前、イスラエルの民は、アマレクという原住民に旅路を襲われました。その時、モーセはイスラエルがアマレク人と戦うために、ヨシュアを指導者としました。モーセは神の杖を持って山に登ります。アロンとホルがモーセの手を支えました。モーセが手を上げている間はイスラエルが優勢になり、手を降ろすとアマレクが優勢になったと聖書は記します。やがて疲れを覚えたモーセは用意された石の上に座り、そのモーセの手をアロンとホルは両方から支え続けた。こうしてイスラエルは、アマレクに勝利するのであります。最初の任地であった神戸で副牧師として働き始めた1年目の秋、9月23日の祝日に、関西地方連合の教会の集い（霊交会）が、神戸教会で開催されました。その開会礼拝で、当時連盟の理事をされていた信徒の方が、この出エジプト記17章から話をされました。「一般にバプテスト教会は信徒の教会だと言われるが、だからと言って牧師が何もしなくてよいということではなく、むしろ、牧師のリーダーシップが大事であり、もし何かあった時には、このアロンとホルのように、モーセの手を両方から支えるという姿勢が大事だ」と、その方は語られました。そのような信徒に支えられる教会は、確かに足腰の強い教会になることだろうと思われました。

その後も五書に何度かヨシュアの名が出てきますが、中でもとくに印象的な場面は民数記の13章です。出エジプトから1年と1ヶ月が過ぎ、イスラエルの民がシナイの荒野を出発した後、モーセはカナンの地を偵察するために各部族から一人ずつ計12人の代表を選びます。その中にヨシュアがいました。（当初はヌンの子、ホシュアと呼ばれています）40日間の偵察を終えた12人は、カナンの地がとても豊かな地、乳と蜜の流れるよい地であると報告します。しかし、それに続けて、その土地の住民は強く町は城壁に囲まれて頑丈であり、彼らはまるで巨人のように大きかった。そこを攻めて占領するのは困難だと述べて、弱音を吐きました。ただし、エフネの子カレブとヌンの子ヨシュアだけが、「断然上っていくべきです。われわれは勝てます」と主張しました。しかし、イスラエルの民は2人の言うことを聞きませんでした。ほかの10人の言葉を信じて、彼らは夜通し泣き言を言い、モーセとアロンに向かって不平を述べ、カレブとヨシュアの2人を石で打ち殺そうとさえしたというのです。その結果、どうなったか。約束の地について悪い情報を告げた10人はみな疫病にかかって死に、ヨシュアとカレブだけが生き残ったと聖書は記します。モーセとアロンに従わなかった民は、やがて神から離れ、滅んでしまったと聖書は記すのです。この時、イスラエルの民が10人の意見ではなく、ヨシュアとカレブの2人の意見に従っていたら、イスラエルの民は40年もの間、荒野をさまようことはなかったでしょう。しかし、その勇気をイスラエルの民に求めることは酷だったと私には思われます。なぜなら、彼らは、何百年もの間奴隷の民として外国の王の命令を聞き続けたのです。戦うことをしなかった。厳しい見方をすれば、イスラエルの民には、奴隷根性が染みついていたのではないのでしょうか。彼らは、約束の地に入る前に、心を新たにする必要がありました。40年という荒野の期間は、イスラエルの民にとって試練の時でありました。しかし、この間に民の間では世代交代がおこるのです。エジプトを出た時赤ちゃんだった人が、40歳の壮年になっている。約束の地をすぐ北方に見ながら、いつまでも弱音を

吐いているわけにはいかない。ヨシユアは、その意味で次世代のリーダーとして主が選ばれた人物でありました。

そのヨシユアに、今日の2節で主なる神が語られます。「わたしの僕、モーセは死んだ。今、あなたはこの民すべてと共に立ってヨルダン川を渡り、私がイスラエルの人々に与えようとしている土地に行きなさい。」神の約束の地が目の前に示されています。しかし、その約束が実現するためには「ヨルダン川を渡る」という困難な課題があるということです。季節は第一の月の10日であったと、後に書かれています。太陽暦では春4月ごろのことで、ヨルダン川は春の雨と雪解け水で水かさが増していました。約束の言葉を実現するには、このヨルダン川を渡らねばならないのです。私たちの人生でも似たことがあります。何かを手に入れるために、困難を乗り越えなければなりません。ヨシユアは、イスラエルの民に命じてこの川の岸辺で3日間キャンプを張りました。下の段の11節以下を読むと、その間の食料を、ルベン族、ガド族、マナセの半部族に命じています。これはどういうことかと言うと、後ろの地図の3番を見て頂くと分かるのですが、このルベン族、ガド族、マナセの半部族は、すでに自分たちの割当の地を、ヨルダン川の東側で手に入れていたのです。（巻頭言で、9部族にこの地を割り当てたと書いているのもこのことを言い換えたものです。つまり、約束の地に入る前に3つの部族はすでに入植が終わっていたわけです。）しかし、いざ、ヨルダン川を渡ろうとする時に、先に割当て地を与えられていた彼らが、残る9部族の川渡りに協力しました。まさに、今日の教会と同じです。先に与えられているものが、自分の持っているものをまだ与えられていない者のために捧げて、助け合うのです。自分たちには、土地の割当てがあるから困らない。ほかの部族のことは知らないとは言わなかった。約束の地に入ることは、イスラエルの12部族（全部族）が助け合って初めて実現する、そのような大事業だったわけです。

本日お読み頂いた5節で主なる神は3つのことをヨシユアに約束されています。第一は、「あなたの行く手に立ちはだかる者はない」という約束です。ヨハネ福音書16章でイエスは弟子たちの前で言われました。「あなたがたはこの世では苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている。」キリスト者の信仰は勝利の先取りを信じる信仰ではないでしょうか。モーセがピスガの頂に立ったときギレアドからダン、ナフタリの全土が見渡せたとあります。遠く北のほう、ヘルモン山まで見えたということです。さらに西の海に面したエフライム、ネゲブと呼ばれるユダの荒野まで見えたと申命記34章は書きます。これはパレスチナの全土を指しています。四国より大きく九州より小さいと言われるパレスチナの全土をモーセはその目で見たということです。このピスガの山はいったいどれくらいの高さだったのでしょうか。富士山より高かったのでしょうか。いいえ、わずか800メートルです。東京タワーの2.5倍程度の高さでしかないのです。しかし、神さまは、イスラエルの民が手に入れる領土をモーセに見えるようにされたのです。まだ、イスラエルの民は約束の地に入っていません。しかし、そこはすでに勝ち取った場所として、モーセの目に見えたのです。神による勝利の先取りです。二番目の約束です。それは「わたしはあなたと共にいる」という約束です。いつどのようなときにも、神さまがヨシユアと共にいるということです。この約束があるから、ヨシユアは勇気百倍でヨルダン川を渡ることができたのではないのでしょうか。一年前の今頃、私は左足股関節の手術で1週間入院し、杖をつきながら生活していました。しかし、今はすっかり良くなって、痛みもなく自由に歩き回ることができています。それまで、いくつ病院や整骨院を訪ね歩いたことか。数えると片手では足りません。それがこちらの教会で良い病院を教えて頂き、問題が解決したのです。神が良い結果を与えてくださったのです。3つ目は「わたしはあなたを見放すことも見捨てることもしない」という約束です。人生における一番の悲惨は、この世の成功や富、名声を得られないことではありません。そうではなく、私たちを存在の根底で支えてくださるお方、私たちの存在を無条件で肯定してくださるお方がいることに気付かず、生きる希望を見失うことです。この世の力に振り回されることでし。しかし、神を信じる者はいつ、どんなときにも絶望しません。なぜなら、主が私たちを決して見捨てず、守ってくれているからです。

そして、本日の説教題の言葉がこれに続きます。「強く、雄々しくあれ」ヨシユアは、モーセという指導者の後を、自分のような者が継ぐことができるだろうか、と内心は不安だったのかもしれませんが。人間だれしも大きな責任を負うときに不安を抱くものです。しかし、神さまが強く雄々しくあれと言われるのです。たじろいだり、恐れおののいてはなりません。将棋の棋士である加藤一二三さんは、カトリックの信者ですが、かつて名人戦のおこなわれたホテルで。明日勝つと名人になれるという大一番の前夜、聖書を読んだそうです。そのときの聖書がこのヨシユア記1章でした。「強く雄々しくあれ」というこの言葉を読んで、勇気を与えられ、翌日の勝負に勝って名人のタイトルを手にしたといひます。どんなときも、下を見てうつむくのではなく上を見上げて歩みましょう。いつも神がともにいて支えてくださるのです。強く雄々しく歩みだしましょう。

お祈りいたします